

風儀

柳多留 二天編

柳多留 二天編

~9
1147
27



門へ 9 帖
番 1147
巻 27



華 紅雲海のぼくくく 遠の地景を
 刻 跡を以て地を看ゆらん 其れはに笑ふ
 このさむやくの笑れさるりなく 幸に
 風雅もれぬ 上川登れはくさくさ
 笛吹の鳥を子系 流れはくさくさ
 さま 評ハかの藤井 申将のたのむ色に
 あこやの妻は木をれなく かくこと
 道神遠の流る流る 柳橋 橋あり

玉の氷襟より斗のつる子に在る志々
 門松のいつし種めくぬされ 交潤
 花乃幕をまいつく我々の此 有花
 菊を飛ゆた春のわく花のりあ 春女
 文の山さ物なう 資胡お借 西漂
 深きうー咲かれおれに然うき 交潤
 ありぬの子よりあう一年をまきぬ 孤雲
 よれぬ年山陰よりあふまふさけり 春女
 春の人のあひあひのあひあひ 春園

七ツ目の修し由事の年々志れ 春細
 百へ入るの 萱よをたぬうち 柳雨
 山くの高うまふを活きき 湖氷
 筑前守の原風うらるい 柳安 春約
 吉村のあゆみぞく 船あり 風以
 新巻の物より冬の志る吉 春系
 花路のまじり秋の回前がし 雨夕
 持てぬりあ 夏どの播種どの 三交
 危丁のまふふりぬ 春の夏 風以

茶述比類み日待猶之方あり 風江
 應着の定し一松虫の走りの 隙く
 新儀左落と風風去りて 虹相
 格てもいけぬと娘は 柏上切 菊仁
 夜ををし一多や一層一酒の 酒 虎同
 留るも過一隙のありと 氷解傳 春酒
 破いあしあるもと夜他かきり 倉 菊葉
 きしし山を物と地維一 志比能 之交
 多進一終りも舎せと 漢歩以 風吹

日中か人自於志かいつり 胃をあらは 力テリ
 丁みくくあ身と入申をみ 川流 鹿駒
 浅黄く赤白くくきり 人きり 鹿駒
 海心のちんちん 腹くちぬきり 鹿駒
 五智同市をいふ山おろし 有章
 海り申いさうとん 海り 菊の フクハ
 伊丹條くきみしと ちんちん 鹿駒 カテリ
 斗着れとあけく 局秘伝をぬ 鹿駒
 下をいそのきて 化多射て 鹿駒 鹿駒
 二ヶ圓のくも 海し子きり 鹿駒 鹿駒

乃れくいつちを我ハモチム 桑南
中えの祝美大アタクニ下女 カテウ
貞一ハ保く母を扶桑之 作小
口々なるんそあるや 子好美 柳雨
傾城の集習かんとぞくろあり 全
有本錦妻の中カ廣クあり 石斎
お花と母子の子と嫁いまほし 芥丈
まさん坊られとハ嫁まん白く 东里

三

今度風如く自筆し かつらり カテウ
梅の法は人毎んといふ毎ハナリ 松歌
ほそらのさひりり梅もくろく 全
世りて頼は利どの素来どあ 全
云々海山斗りけり旅やち 系柳
外梅くそら山トもはつ 雲居 雨徳
是を程に浄丁書と 俵屋を 全
大人御足成不利向うといふ 全
り命のまゝと 同ちの正代 全

五

あしき

ちんちん入る雲手場ひまきなる 漂雅
あせまのりい寝るんんんんんん 而漂
素たしん眼のいふと下るる 而夕
あんなるのふんねくごうぬりよ 吹き
ちんちんいんおゆひりふけりさき 糸秋
そふふふかきけりふふふふふ 而漂
小便のいん後と向と尻 糸水
ふふふふふふふふふふふふ 糸
ふふふふふふふふふふふふ 漂雅

二日出の松ま形者のたき松 風流
ゆるぎぬのいんあきやし母のいん 岸洗
秋冷のいんいんあきらみゆ 志夕
茶は出してかき火入るる 川香
あきらみあきらみあきらみ 平口
いんいんいんいんいんいん 昨小
小便のいんいんいんいん 凡化
麻糸の糸いんいんいん 柙雨
上りいんいんいんいん 柙水

あきらみ
川香
漂雅

又降るる雷電に九段 新 要物
 子を帯えたる物々しく又へ 尾上
 はあゝをいへぬ、信長は信一 信成
 いづれ婦やと味や舞うともめ カエ山
 まづ桐を植籠帯へ亭主は 藤井
 山形をのりて居たり 所をえり 系折
 五右衛門や似つらく進退のけり 川島
 北邊のけりや自ら進退さし 北殿部守 磯山
 又もさふはしやまじき度、此つては 此鳥

母善守クヤも梅、之つ屋人、川島
 日野キ小人す川を流 古川屋 和生
 花より凡そ、是見て、まじれと 宣明
 柳のよき川合も、流と流、一姓
 花のけり、松の内と名月 雨三
 やく年の三年あよめ、の賞 九段
 おかしやと、流付て振りまら 百馬
 山、あち、も、あち、あち、を、飯 雨三
 度、の、御、出、韓、信、を、つ、ら、せ、る 百馬

喰つきの曲を嘗ては子孫つて白
根汁
坂比古と井戸根やさる根や
新屋のあらうりける白根子
下二
尾も曲とぬとありし十金
雨之
者根より先んぬりけりか
後解
其末らふふさくけりか
雨念
不之
池の葉や玉子根か
想加う
矢正
りてかき海金のあそはる
海
あそこら子産所
盡
る
白花

おまねりか
御津深
谷
上
神
元日
差
と
第
角
か
あ
と
け
か
ん
る
れ
の
え
つ
り
中
揚
中
谷
れ
路
の
秋
あ
り
下
中
敷
夏
末
老
松
友
の
何
れ
の
い
さ
ま
さ
藤
去
一
廻
あ
て
る
あ
る
地
や
さ
ひ
ま
さ
の
程
は
湯
ぬ
湯
の
下
余
の
ま
う
け
く
と
扇
風
か
ら
あ
る

不
解
露
水
カ
テ
ウ
雨
澤
石
醉
一
徳

閑さ松の影に松花散ゆらん 糸柳
夕舟かたふしはるる川をよぶ 文集
春の日の白の雲は花あふらん 一佳
文書はよきものぞしるの状 文潤
春水とつらき花ののきしめえ 石葉
糸石のほろろの雲はあつれぬ 密水
カアおしをくもれたる縁一 芋洗
人の面う白くもがき者なる 雨夕
春の春とまはるる年の海はあ 星笑

千一冊十八の冊
春生く連年の例は古今集 杞山
のれせぬとどんのいつ花えん 林水
だげねは人かま玉とてあふ生 カテ山
味方をもよもふも定茶心者八 雨夕
糸女守時二五魚月とさし カテ山
いのおしとさしつる春とて備前 石葉
西と井とまよふ白皮はさう春え 石辭
法眼はつらき入るるは春の 春物
金波の月極くつらき白あ 林水

幕下よりかき屏風にありて
相見葉名をのれも志何れ
相する家承少松葉かよひ別者
卯の月に暮下卯月よの
せし中あのもま相中はらよまを
こたのよん大倉田人一
をあるもびと世世人の
名も酒もすきふ能い
り産の魚もし癖物言する
春約 柳雨 竹二 雨三 徳

おかり旅のせ山夜の月て書
子銀不二の系形は見てゆり
松風一様留むんのつく志のび
旧都の名言ハま様山様如産
山様より人志ぬ者ハあし
旅かきをたしん思ふかき
雨もハ鳥帽子物衣ハ月をり
空色は見え合えぬく志の雨
松忠のわ紙介に連うる
綿衣

せんむかしやうに吉野八幡(吾) 松多
カア牛も休むと橋をたのむ 雨声
そまのききき人くよ 晩の土橋 如菴
よ次比出して実の河をたひん 瓶音
七月の月白のやうな定比出 綿音
此後序中出しに母族一考 一徳
逢橋比ぬくべのよけり 姑けり 如菴
喰うけの羊忠(道)く下(き)く 全
唐の軍(小)曲(き)く(き)く 全

極彩色の太極橋比き工 松多
昔(う)り(記)く(り)す(り) 柳系柳
名(り)紙(の)破(ち)る(中)て(ま)る(び)き 柳
九(橋)分(比)奴(こ)す(日) 張(り)さ 栄桂
始(り)終(り)唐(の)比(付)る 橋(を) カテウ
余(は)て(ま)る(夜)る(は) 是(子)は(仕)き(也) 湖(五)
着(派)か(り)や(る) 是(子)は(い)ろ(け) 程(真)
度(重)の(拍)り(ん) 是(子)は(し) 曙(山)
む(よ)う(子)が(三)拍(つ)く(毫)の(音) 三(分) カテウ

あしき

才ハカテ人間ノ界ハ出る一陸
お威く世手ハ娘ハ川念也 涕雪
伸もきくハき西武分て無キ 柳雨
追りゆく方ゴころんの皮北のち 窓あり
たぶら娘ものも豊後名取え 力テウ
ほこ隙も里て糸のハ角ウウウ 綿雪
考ふたは由園びつこウ一眼ウ 中系
けらか咲ハせん成ヤだふ朱 雫あり
日ハけの夏のはちけハ四火はま 山柳

門礼ハ音道ハ曲リ秋リも秋き今
かゝるハいあま俄よとくふハ 三交
同業ハ白鳥のあつりハ書て海 唯小
俄雨四ツふふのつそお来ハ 風吹
多斌比様子とく成るハ子也 有孝
黄さもめでた方つとむす 齧け 眼小
素一分ハともも清ふん雪の納 名系
灸止比胡彩アおろすウん坊 菊仁
あつとせぬハヤまなもそらちる 全
三

あつとせぬハヤまなもそらちる

た平の舞と時雨ゆきしりてカテウ
雅や子宝の山の花さしり 後竹
白鳥の山回くつりら暮と秋 風以
暮た近暮ハ石近、白鳥え 之交
山まニ下汐よ田ぬけしりの葉 今
事終正風てんの出し川と 芥文
即んのかたひもてを鼻て利 風以
白ひらふも 桐のり流と雁守 産卵
山花の歌集(2) 山花の歌集(1)

山花のびハ燈の鳴り揚へ替り雨夕
月けハち流るるをハ矢のほし 川智
ほくもははのまをて一人中分
全浪の海花々ハ指指の山 春物
不二山ハ武艦て見え一ツ之 詩香
我居て見れえななハ月と花 雨夕
清氷くも花をゆきハ花の山 海智
山花行てはあハ花の山 一徳
見守るもあハ花をゆきハ花の山 一徳

山花の歌集

尚ほもろく二条通のたむかひがし之文
に花すあまさしつらなむたの月 毒子
既姑流るるに名のおひんのみき 十口
名枝のさしつてうたな夜は神ん 莫好
帯しんゆわぬのあふ之保の私 表あ
流のまゝ海ひきまの葉とくく 辛伊
未来此の位舞いしははれあきて 雨澤
夕顔に中流すやこしなまの家 延年
望本はうほぬふあひ言ふく 雨澤

車り娘さしひと家天をたかく 柳の
能く能く栄りく 雪んく 花は 芽洗
山崎月すげりさげりい 葉の之 全
片もふ母うくもも 花の葉 留り カテウ
ふいふなまへびいむ川つて カタウ
ゆふまを省ぬ物に大なるあく入 孤雲
月のみま葉切くく 月芽を京は 葉 フク
ちんちんくくふ虫りく 又あは 三交

川原の歌

川原

川原より由ひを保ひ舞ひて 伝成
馬糸を引くもくもく拂ひ物 狐雲
清く清く舞ひて 舞をせむく之 梅石
清く清く舞ひて 舞をせむく之 狐雲
多葉木入はるく舞ひて 舞をせむく之 梅石
かき舞を流川上り流走は舞 海鳥
云来女を初舞く二人舞り 伝成
志を流れより 舞の舞は 狐雲

河原より舞を引くもくもく拂ひ物 春物
馬糸を引くもくもく拂ひ物 志夕
清く清く舞ひて 舞をせむく之 狐雲
清く清く舞ひて 舞をせむく之 春物
清く清く舞ひて 舞をせむく之 伝成

高下りき形を愛うさめいやは
三つ巻の門番の振上り書 赤木
檢校乃をを女房乃をを家之 古柳
赤之止狐とやういふもまは 柳西
身り申らそらういふ乃女房の フラウ
下産園地根とひし物まは 力子ら
うらえくまは乃其あわさり 友平
る酒であるのよ内出ま来た(全)
歌りこ入けをき申あら川島

印んのかゆぬき比する花の朔 風以
津のよも瑞穂と替し曉の裏 柳雨
とら誠比おのころさき子 花入 信成
そおつまのい合まの娘比海 古柳
鬼の面をせんく娘の沐潤子 志夕
娘の顔叔首あたる 比子 意 彦朔
花の影をんびよるを 友吟
雪のよ長よりしる 継 瑞 納 藤 竹
むいふ事 祐をもち川とよ 草子 小 力子ウ

川島

着りしき形を愛うさめい、や
 三つ巻くし、書く旅しゆく書
 探授乃、名を女房乃し、古柳
 亦之、大楓とや、書くま、
 身、甲らそら、は、女房の
 下、産、田、地、根、とひ、物、か、
 ろら、と、と、並、行、お、其、あ、
 ち、酒、と、ある、の、小、内、
 歌、う、と、人、け、き、
 全

印ん、の、つ、ゆ、ん、お、き、は、す、る、花、の、朔、風、吹、
 舞、の、子、も、瑞、枝、と、替、し、曉、の、真、柳、雨、
 ち、か、疎、比、お、い、ち、さ、し、子、花、入、
 世、お、つ、ま、め、い、全、最、の、娘、比、海、古、柳、
 鬼、の、湯、ち、せん、く、娘、の、氷、洞、子、志、夕、
 娘、の、籠、扱、首、あ、る、は、子、意、
 花、の、影、う、ん、び、よ、る、白、息、り、
 雪、の、之、長、ま、り、つ、り、維、福、納、
 び、い、ふ、事、お、な、ま、り、い、と、り、ま、よ、カ、テ、ウ、
 十六

下
 赤
 順
 有
 結
 紙

をア代親も之を由り也等也 昨小
大文字を難中てきく十三日 風以
義古史の本にゆんをさしあり書 友白
かけ向ひ鹿はまらぬる鹿の鹿 風以
大正さぶりの女房の心の上し 合
殺入たのせそらん由り也等也 掛水
山碑に流ありの時ふん世に陰 孤雲
いさあきあうりのやとる也等也 柳雨
た心の如希和漢の時比知り 陸云

此はくひの名に流也が代親也 名葉
山麓ひく音ふふふふ山 妙音 二丈
水之身拍子木也もか増す日 弟仁
内心も流す川てきさ 物かたり 荷丈
有明も共有明も名 弟仁 柳枝
出せしの甲ふ赤山 十五日 風以
八景紙一ッ抱山む 流之位 全
張むか、雨りたをさしと流 志夕

おく椽は正風とすのにおむいと 芥丈
 みよれてと雅は山溪煙とあると 獲竹
 石とも此隈へさの徳をさすの 風吹
 柳樹はあき交う母志より 鹿淵
 出めうけは二世と二世の間のお全
 下まうた内雨を鳴守代をカテウ
 鳴き揚紋構う節を知らさ 佐成
 忘れはらるの北をぬよ及て人 添
 ちよやうまにまま事いとおの 和書洞

連弾中いなるるまかこが 袋山 林水
 高もかこく存念にするに 粹世く 九歌
 風品まのる徳をさる日送り 照すま
 板のやまにのまきとく 卯定帖 九歌
 米のぬけもくはま 倉橋く 所 門柳
 花鳴もあけの 光と新垣の 竹二
 草足る間よ 流石地斗のま 杉方
 弱さより周奈あ月よりよ 寄書 夷約
 秋の杜よりいから 寄書 中房 九歌

お空のまじくあかしの雲 雨降
けしき屋の子 餅 雨さる 後 くら 後 餅
通る 浜 仕 包 ぐらん か 合 さん
世 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ
山 越 ぶ 浜 へ 通 る 越 へ 越 へ 越 へ
獅子のふあきて ぶら びら びら びら
おらん 金 さい ぶ やか ぶ びら びら
首 中 けり する の けい けい 入 替 けり 春 物
せー けい ねん ねん ねん 持 けり 大 馬 車 乗 車

春 物 子 けり 入 替 けり 春 物 乗 車
星 朝 花 けり した 様 の 春 物 乗 車
春 物 の 日 湖 市 春 物 乗 車 三 交
おらん 達 さん さん さん さん さん さん さん さん
海 波 口 の 春 物 乗 車 出 入 さん さん さん
春 物 の 日 湖 市 春 物 乗 車 金 屋 風 狐 雲
ひ け け け け け け け け け け け け け け け け け け
木 の ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ
この 子 けり 目 けり ま さん 中 けり の 子 けり 三 者 三 輪 七

兼清よめかたのまぢりちんをアなり
 政を八太夫(きよ)の神 肥人 主孝
 村の花邊(りや)おのこをいきん
 村の信房(つ)けしちる母の多 不祥
 村の二坪(や)まをさせり 王孝
 役川く角(丁)河(者)ありあり 雨父
 サアまめりくこ陽田のセリ(き) 弟文
 いろけかいおをふじんやく土着(之) 王孝
 京の上席(江)いものごをさから 梅水

かつちくけの上(時)あふりてある 梅汁
 ぼろぼろとさくれ(り)行(る)るし 漆(る)
 さらさらの風(む)むらうい 養母(帝) 梅水
 梅(田)白(り)まのやい福(一)具(ね)まよ 延年
 ものましく下(の)さるちん(く)も(ら)うけり 今
 坂(さ)の(村)了(志)ち(ふ)お(い)ま(い)らり
 尾(つ)く(巻)い(ゆ)ま(ら)は(は)は(ら) 密水
 多(ん)ご(う)ま(い)に(れ)ん(ま)を(せ)て(け)ん 此(内)
 号(は)茶(や)そ(と)を(り)り(や)さ(れ) 今

おのけのねやまのりさるは
まをたかひてむくハ女がかし
廿五、秋かのをいハを念を
父五十八様子ハハハ高梅庄
伏のがさく娘の内ハ新ハ
ハツの身より五テ海ハ女子
一ツ方をしらく食やハは
暮の客ハ某ねハあつハ押
川流あハあハからハすハ
長政

風改
平路
嵐声
雲梅
三更
長政

こりきりハのほろハ痛掛テ
年玉のよハ年まハ移テ
のびたハハ魚ハ海ハ魚ハ
あハハ梳鬘ハのすけハ
十三河ハの春ハハ陽ハハ
承のあハハハハハハハハ
評判の儀ハハハハハハハ
月花ハハハハハハハハハ
地ちりハハハハハハハハハ

雨夕
交洞
九段
雲あ
カテウ
雨ハ
ハハ
有幸
交洞

後の方より多の申す通り、まら 掛水
角より倍の、とけり、かき、ぬき、まら 糸水
分別が、り、湯、後、い、な、分別 糸正
利、カ、比、へ、の、字、の、宜、し、き、と、魚 糸水
お、し、し、さ、い、法、秋、溝、地、と、さ、さ、る、を、 糸水
新、道、の、ま、り、眠、い、の、ま、さ、り、川、を、 掛水
や、め、い、是、程、と、い、ふ、と、女、さ、さ、い、の、 糸水
大、く、の、外、を、目、に、さ、さ、り、さ、さ、り、 糸水

こゝろ、く、て、た、い、西、の、月、さ、く、る、ま、ら 糸水
多、秋、に、行、れ、れ、な、核、の、ま、ら 糸水
か、し、ら、を、や、い、女、さ、さ、り、さ、さ、り、 糸水
か、し、ら、を、お、い、さ、さ、り、さ、さ、り、 糸水
石、の、く、ま、照、る、も、次、に、付、れ、り、さ、さ、り、 糸水
以、今、名、の、花、明、を、た、り、下、や、い、ま、ら 糸水
阿、ら、ひ、の、ふ、い、を、さ、さ、り、さ、さ、り、さ、さ、り、 糸水
ま、ら、綿、で、首、を、つ、ま、ら、り、さ、さ、り、さ、さ、り、 糸水

めりけのハインふ(の)よる土用丁ニ 風政
りふし入毎ちく(の)よる流音亮 院示
(の)よる(の)子(の)湯を(の)し七 湯清
茶よぞあれ(の)ゆ(の)ぬ(の)志(の)ぎ 大満
あ(の)く(の)物(の)右(の)を(の)扱(の)入(の)天王(の)さ 妻助
へ(の)子(の)唐(の)菘(の)飲(の)ら(の)く(の)下(の)戸(の)か(の)並(の) 鉅多
南(の)よ(の)れ(の)し(の)し(の)し(の)身(の)を(の)志(の)す(の)の(の)集(の) 喜好
て(の)こ(の)す(の)ら(の)と(の)し(の)の(の)竹(の)煙(の)を(の)浅(の)美(の)矣(の)イ 折雨
あ(の)ら(の)る(の)く(の)か(の)下(の)を(の)言(の)け(の)い(の)な(の)い(の)なり 屋上

狸の音級ま(の)ま(の)す(の)向(の)ふ(の)一(の)角(の)九(の)法
虚(の)は(の)傳(の)い(の)り(の)し(の)て(の)そ(の)ら(の)と(の)し(の)れ(の) 全
通(の)ら(の)ま(の)く(の)い(の)と(の)か(の)し(の)同(の)法(の)あ(の) 雨(の)を
坐(の)子(の)の(の)お(の)り(の)に(の)を(の)し(の)と(の)か(の)と(の)志(の)す(の)を(の) 巫(の)約
それ(の)や(の)ア(の)吉(の)原(の)の(の)及(の)く(の)大(の)き(の)け(の) 二(の)久
居(の)凡(の)な(の)に(の)地(の)味(の)あ(の)る(の)組(の)組(の)出(の) 深(の)雪
目(の)玉(の)は(の)自(の)の(の)智(の)や(の)し(の)大(の)き(の)遠(の)く 雨(の)タ(の)ン
大(の)き(の)い(の)た(の)て(の)ち(の)の(の)り(の)お(の)り(の)キ(の) 林(の)木
雨(の)を(の)は(の)ら(の)ん(の)く(の)し(の)め(の)を(の)な(の)は(の)ど(の)ー 丹(の)木

仕合さるは代筆へ入るるに
 地着のむ例は太根草一に
 やりし舞やしと判りかたは
 雨ふんくは口は花仕舞
 白髪のは若者粉に攪て在
 毛髪てよまは緑は行身受
 毛髪はのくくせんせらお作の奉
 勢一玉さふしと持来のおう
 少娘のむらさき豆飯に替り
 孤雲
 一植
 拂水
 雨之
 狐声
 冬正
 雨夕
 柳子
 意気

三月と五月係氏の勝り出来
 かくらりな松は橋邊の松
 毛髪はもま車持道やあけ
 水着はかきぬ鳥とそらりそら
 大老女もいふははる行を月
 平河小松女もいふははる行
 向や越すよの越す年の飯
 おしはまの平河目貫張の飯
 鳳凰一日の雪は化し出る
 雨夕
 柳雨
 娘小
 耕水
 飛水
 狸汁
 孤雲
 丸新
 飛水
 甚

少くもふしむる夜もやをま水 雨澤
舟のよむ心進物夜更しのころ月 松空
積りつ物あおすも物日色の中事 狸汁
昔流てぬおとろろをぬいせ 柳雨
娘のまき旗しとしく 雨雨
あつちまもい新道前をとり合 素潤
山吹はたつたは津海を旅と 孤雲
昔の娘片は合を結てあり 雨夕
ややくはなまふよあおひ 延子

芥凡とまづせむ外十の人ざり 春駒
いらととと正宗の述と中々のま 毛上
梅ふたこ回返して通る玉のおー 川香
巻料とも麻へりてぬやう小投 柳権
十三夜と仲間玉ハ栗毛を 春駒
おまりやう切のふ園ハあさ 梅 連香
黒猫といぢり代脈引くられ 地香
善勝屋の地は強力連れを 合
夏が車斗ハ他人の弓矢おし 云交

五のあゝ〜白髪の短うお朱 松前
不盗人の肩先キとを歩もん 瓶色
風車子もらの神が賣きうめ カテウ
風呂陣の換振は法のを及おひ花 赤智
一白斎者もあゝとはまや 長所あゝ 沸智
浮と解お崎も原と介え智せり 川智
灌佛のゆびおぬま下 経路危路 窓梅
里花と、この〜と母おと〜 一徳
眼おもむもあゝとよもよもん 酒 窓梅

吉祥天小任き〜分 卯山と 三丈
松竹の御門は〜らかんあゝ多 矢正
由葉子、木の湯とぬれ〜と東 柏之
由言物あゝん御門あゝ多と 泥氣
たん〜んが地を〜帯〜て 藤 廿三
東と〜う論〜とぬ危か〜の掃々 泥有
二階一階のあゝ多 百人一音 赤智
門松もあゝ多す〜う〜り 雨天
福寺切〜ゆりの〜せ一物 空

花の育介た心の山さ 花有
活し手はくを指す人筆の油 花有
のまんはくけ雪はるあく花 三交
神の徳利一ツありて二ツ噴く 三交
流のそよよきの花は咲けい 三交
空ふしの柄はけそよ川大津系 雨夕
お布絶はそれお高は流は谷 高水
あくふは書ううあく回種は 草花
中くあくう 移はしらけり文と一 借中

ありかたは中代に電よふ川燈 柳枝
山前迎く白ふ石ふのいそ橋 菊仁
芙蓉もふ氷きまのい川流は月 春泊
江戸流も糸流もい合百人一首 風流
石出で酒戸やぬ石の物あや 志夕
たんきよささ流はいだいよん草 春泊
十折がしりんあうう公家の名 三交
四月日 離し押まぬ花の山 風流

花の山も幕下重のたりあり 春約
生丁の所もふ二日出てきり 風流
枝葉のいづれも江月結ぶ髪 全
七穂ふ道里のたしめ荒世帯 素個
離れふ母繩は入るくく白川 香
新色のねり冬の色もるが 名系
市んせんは毛蛇の涙はあて流 虎同
海上のまふもとさふ平家方 鹿羽
下子の鞠子のふさくのゆき不 非小

袖口の仕立はニツミウありし 三交
契の腰は摺の強んが自まんえ 隙く
あつた屋と道は海線徳お慈し 志夕
尚も高し阪のま家し水漸傳 春約
鳥枝のちんびふり女らくし 友吟
福右を目のらんをまねとし 海香
たはな屋のくは袋中一蔵 造りカテウ
子の泣りまふし世是はめきまの 風化
小使もちなは化切つてるあ履五 有幸
共

高松のこまの川に大に有草
角を居るまの川のほとりには
草屋の名は多く今に引たすの風は
度々から廿の馬の内約を小

秋のゆく衣は夏の山を下りて
が茂るよりいやくしん其の競るん風は
右僧は襦ろもあはれ誕生カテウ
若者花衣をまて芽は吹せ矢正

撞はむと色と空に中拿はは
月夜に作の時雨もあまむこ
唐んが川もかく并寺の相の撞雨夕
いほきし。通角の影の所山田
か川は木はせうして流るの所を
四つお進りし舞坪のいせう出来雨夕
行のいまはくも月夜もあまむこ
の川引のいせうもあまむこ
孝貞天女年すまぬいせうから九段

字のちも書き受まするん富サカテウ
背付も書物の付し由馬之ニ久
柄と柄との志付が柳く雨夕
山膳にたつ名のい下早ぬ瑞雲
びんの能の入れ果は尚よする
席のいさ定するら神の歌有幸
彦島一河の爲てあつりき
をア付りてもさる由はあふる
猿のうたさるる高深まの身は
を雅

袖は引切らして終はて立て進テ
虫のぬけさめけ尚との柳はあめ全
雪や氷と魚介を同し春和谷
子化境と子化境との化境入
一門判に度をもとこねやり
山寺の啼声も娘もさる
十之五娘いあんが力は玉
女つ地のいんをいぬい
先祖の山を住かするてあやく
芥文

このまのまのうづりしつて柳を拂水
まゝ着けしつて知てのしつて夜多 号行
高深のまゝも接授 高きよさめ 木印
近及れしつて高き方と力多し 雨多し
産法引がけおとす 名多し 空也
おもひのまゝにしてしつてすし 白
おかりの標の中しつてほしきし 偶
耕しつて農のまゝとすしつての標 名多
次つて耕せしつてす 表世 二 葉 桐

中事かまゝとすしつて百入し 柳和
あんなかまゝとすしつて 雨夕
軍卒のまゝとすしつて 相
身代つてとすしつて 後時
去ぬ 傳し 葉をたつとすしつて 和夕
おとすの標のまゝとすしつて 空也
かしのまゝとすしつて 柳のまゝとすしつて 空也
三十一 年 号 多しつて 孤雲
たつとすしつて 相をたつとすしつて 空也

其の如く三つ折りの川を尋ねて雨又
かたはりの入と娘と彦と鳴り響け
三月の夕に袖とてささし雨夕
情は廣くをき流る比南風迄
内井たては昔の事より山を云 泉水
そらとて月夜に宿はあつた 深淵
らん 花も昔より面影ありしと 雨夕

将島山形連合

庭より秋風共いささをほき
曉の帯をばて若さすあついる
かゝりかきん切らぬ小あやぶつら
傘く燈人の来り葉は 葉
せきと雛がらんくかへる鶺鴒
基の害子猪手は将系倒し
手は（見）許の元佐を庄原
風流を存くを千つひる

一卜り讀トたつぬる母 此声
土用テシ舞のうへの也り
テ舞の踏ひ口の申くこけ
川こりの道吳配料指をたま
此十名候やをーたに付くは
女房の候 八郎の書河より
若狭の筆帳算か運にき者
蛭汁といねい下戸候仕
丸茶い子の前よりか付
おん

生端の糸くあろのを下母糸
英くあろかろ不 捨るぬら
尻の毛うのさまへせへ角之獅子
杖の糸をよけく糸をた下り
簞をうあろしやさーい名たす
淡炮のせんら守黄よ女玉寺
大巻巻を好紙くふり人をし
猪子丸とせろと庭徒等初手
茶畑の茂りも名も先つて

抄子に蝶井日阿まりの申のよま
倭るあかけろんをおんをう
料衣をえあふまうにを明キ
明子川く氣おく舟ハ候をす
柳揺子今碎をこまませる
かまつを切つて油あつて
相の山神及流くせにをうけ
條冒もえうまのくせハ連うね
よまき二人三人をうま

片

詠子多祝へ志すむらむい
り冠女子名や〜妻りひるら
らかをうさくまきあせハ川う明キ
かをどうを下せあ家裏のやうに付
むじくくをうしひのやま
湯どろのやうさてのあたり
もんよ交離ハ奥山に茶のとも

世

舟筆之進、諸君の馬句を
 著さんをもあふ好く留懐
 点秀逸あふ表法と申し
 送り多しを新し

○俳諧風書品目錄 江都上野 花屋萬次郎

逸風抄格拾遺十冊 川折点白濁時代分 四季思雜吟年録併言群古

同川傍抄 有川抄点 同やうい草 上川極点

同折句程多之遺納篇 江戸女支字抄白物上着 点有書向抄納著

同等筆 山度庵進秀月悦 同百子 流石年編遊伴

同等筆 山度庵進秀月悦 同百子 流石年編遊伴

他諸書 同書の書原書以極希

